表 1

日野

伯太

三原

御調

最大速度(kine)

0 X < 0.2

 $0.2 \times < 1.0$

1.0 X < 5.0

5.0 X < 25.0

5.0 X < 125.

観測点センサー深さ(m) 入手地震波数(個)

100

101

205

200

基盤強震観測網(KiK-net)における表層地盤の震動特性

日本大学大学院理工学研究科土木工学専攻 学生会員 松澤拓郎

日本大学理工学部土木工学科 正会員 仲村成貴 鈴村順一 花田和史

<u>1.はじめに</u>

1次元地震解析法¹⁾は地震工学の分野において多用されている。しかし地盤が軟弱 で地震動レベルが大きい場合には、観測値を表現できないことが指摘されている²⁾。 この欠点を改良するために振動数に依存した剛性や減衰の効果を考慮したモデルが 提案されている³⁾ものの、著者らは砂地盤での微小地震記録においても1次元波動モ デルにより表現できない現象が存在することを確認している⁴⁾。本報では防災科学研 究所の基盤強震観測網(KiK-net)⁵⁾による鉛直アレー記録を用いて、1次元波動モデルの 適用性を検討している。



地中観測点と記録波

49

52

44

42

伯太

18

22

11

0

表 2 地震動分類

日野

20

19

7

2

1

最大加速度(ga

972.2

720.4

461.0

374 9

御調

24

15

1

2

0

(個)

三原

31

0

3

0

KiK-net の観測サイト内で、微小地震動から強地震動までの幅広い最大加速度が 記録されている日野、伯太、三原、御調の4観測地点(図1)を対象とし、1998年 1月から2001年12月までの地震データを抽出した。各観測地点には地表と地中に それぞれ上下、水平3成分の加速度計が設置されている。表1に各観測地点の地中 センサー深さ、入手地震波数、地表面NS成分の最大加速度を記す。

<u>3.伝達関数</u>

2.観測データ

入手した加速度記録をフーリエ変換法により積分した後、0.5Hz のハイパスフィ ルター処理を施して速度時刻歴を計算した。各記録の地表面 NS 成分最大速度に着 目し、表 2 に示すグループに分類した。同一レベルの時刻歴を振動数領域で平均化 し、バンド幅 0.5Hz の Parzen ウィンドウ処理を施して得られる最小、最大のグルー プの伝達関数を図 2に示す。同図より地震動レベルによって振動数特性が変化して いることを確認した。



Key word地盤震動特性KiK-net1次元波動モデル伝達関数硬質地盤連絡先住所〒180-0024東京都千代田区神田駿河台 1-8Tel& Fax 03-3259-0689

<u>4.1 次元解析結果とその比較</u>

微小地震を表現する1次元地盤モデルを検討した。地盤モデルはKiK-netの地盤情報を初期モデルとし、減衰をh=h0+ / + で仮定した。各観測点の伝達関数の卓越振動数と振幅値に注目し、各観測地点の伝達関数をできるだけ表現 し得るよう検討した結果、表3に示す地盤モデルと、図3に示す伝達関数を得た。同図により1次元波動モデルでは各 観測地点の伝達関数を表現できない。

表3 地盤パラメータ



<u>5.おわりに</u>

著者らは砂地盤での微小地震記録において 1 次元波動モデルにより表現し得ない現象が存在することを確認している。今回、KiK-netの観測記録を用い微小地震記録について検討した結果でも、同様に1次元波動モデルが表現できない現象のあることを認めた。

参考文献

1)P.B.Schnabel、J.Lysmer and H.B.Seed: "SHAKE a computer program for earthquake response analysis of holizontally layered sites"、 72-12、 University of California Berkeley、 1972

2)山崎文雄: 軟弱地盤はよく揺れるか揺れないか?実測とSHAKEの矛盾を考える、土木学会第45回年次学術講演会、pp.63-78、1987.8
3)吉田望、末富岩雄: DYNEQ: 等価線形法に基づく水平成層地盤の地震応答解析プログラム、佐藤工業(株)技術研究所報、1996
4)松澤拓郎、仲村成貴、山田雅一、鈴村順一、花田和史: 伊豆諸島群発性地震で観測された砂地盤における地震動、第26回地震工 学研究発表会 講演論文集、第1分冊、pp.245-248、2001

5)防災科学研究所ホームページ、http://www.kik.bosai.go.jp